

高等学校グランドデザイン会議第3回第2専門委員会概要

日時：平成18年11月15日（水）

13:30～16:30

場所：県立図書館 研修室

<出席者>

高山委員長 佐々木副委員長 伊東委員 遠藤委員 工藤委員 佐藤昭雄委員
佐藤和志委員 下山委員 杉田委員 斗沢委員 野呂委員 馬場委員 福原委員
藤田委員 本谷委員

開会

司会

それでは、定刻になりましたので、ただ今から「高等学校グランドデザイン会議 第3回 第2専門委員会」を開会いたします。

議事録確認

司会

議事録について、事務局より御報告させていただきます。

【事務局が、配付資料に基づき説明。】

地区部会意見報告及び第1専門委員会報告

司会

地区部会及び第1専門委員会について、事務局より報告させていただきます。

事務局

地区部会の意見につきましては、先日送付させていただきましたので、そちらを御確認いただければと思います。第1回目が開催されたばかりですので、突っ込んだ深い話には入っていませんが参考になる部分もありますので、十分に御意見を汲んでいただきながらこちらの議論を進めていただければと思います。

それから、11月1日に第1専門委員会がございまして、議事概要について委員の方からまだ御確認をいただいておりますので、口頭で報告させていただきます。第1専門委員会の概ねの確認事項ですが、新聞のコピーも添付しておりますが、学級数につい

て市部では、普通高校6～8学級程度、総合高校4～6学級、職業高校4～6学級程度が学校規模として望ましいというお話がありました。町村部については、それぞれ4学級程度、場合によっては2～3学級もやむを得ないという御意見がありました。また、ほとんどの保護者や生徒が普通高校への進学を希望している事から、普通高校の割合を今よりも増やして行く事も考えられるのではないかというお話もございました。ただ、実際に普通高校、職業高校、総合高校の割合は将来学科再編を実施する中で、自然と決まるのではという意見もございました。

それから、決まったものではありませんが、普通科に併設されている商業科については学校の活性化に役立つ部分もありますが、商業高校にまとめてもいいのではという御意見もございました。統廃合については、望ましい学校規模を維持するためには、やはり市部も含めて大胆な統廃合をして行く必要があると皆さんの御了解を得たと認識しています。職業高校については、できればそれぞれ独立した形で進んだ方がいいという御意見がありました。

後日議事概要としてホームページに掲載されますが、現状として御報告させていただきました。

資料説明

司会

それでは資料説明に入らせていただきます。

【事務局が、配付資料に基づき説明。】

協議事項

司会

続きまして次第の「2 協議事項」へ移りますが、これより進行は高山委員長にお願いしたいと思います。

高山委員長

今日は4時30分までの長丁場ですので、これまでの2回の話し合いを踏まえて大まかな方向性について皆さんで確認できれば、大変意義あるものになるのではと考えています。色々な事件で教育界が揺れていますし、新政権下で教育基本法の見直しもあり、非常に重要な時期です。平成21年度以降という事で非常に難しい所もあるのですが、現時点で考えられる最善のものを作りたいと考えていますので、活発な御意見をいただけるよう御協力お願いします。

協議事項という事で、これまで設置した学科・コースの今後の在り方、普通科におけ

る全日制単位制の在り方、新しい学科等の設置の必要性、統廃合による新しいタイプの高校の可能性、専門学科の募集方法、の5つの項目について話し合いたいと思います。

前回の専門委員会の中で話された内容が、資料1にまとめられています。大分時間が経っていますので、内容の確認に少し時間を割いて、前回の議論を踏まえて進めたいと思います。まず、社会の変化と企業の変化という事で分けてまとめていますが、その中でも人口の減少があります。この高等学校グランドデザイン会議も、中学校の卒業生数が減る事を大前提とした中での議論ですので、人が減るという事は将来の動きとして重視されるべきです。また、企業側や学校の先生からも御意見が出ましたが、生徒の資質と言うか、挨拶ができない、だらしないというように見られているというお話もありました。昔の中学校が今の高校と言うときつい言い方ですが、そもそも人付き合いや交渉するという基本的な資質が不足しているという事ではないでしょうか。

これらに加えて、こういう事もあるというお話しをいただければありがたいです。

佐々木副委員長

今のお話のとおりですが、いただいた資料を拝見すると町村部の方々の危機感が非常に強く伝わってきます。特に目立つのは財政の問題です。財政が非常に弱くなっていますので、生徒側の希望が多様になっても、メニューをたくさん用意する事もできにくくなっています。県財政は小泉政権下できつくなっています。安倍政権もかなりきついでしょう。財政のきつさが結果的に、地区部会で出た意見で言うと、町村部の学校がなくなっていく心配につながります。その危機感の強さが以前より遙かに強くなっている点が、前回の高校教育改革とは違う変化だろうと思います。

高山委員長

前回の答申時とは時代背景も違います。そもそも青森県の経済基盤自体が揺らいでいる崖っぷちの状況で、大事だとは思わがなかなか教育だけにお金は回せないという内部事情もあります。その中でも、マイナスの影響を最少に止め、将来の子ども達に満足できるような生き甲斐・やる気を持たせるのが我々の使命ではないかと思います。

これまで、生徒の意識については余り話されていなかった気がします。やはり、子ども達は時代の動きに流され易い傾向があると思いますが、進路や職業についての意識の変化について、長年接している先生方からお話してください。

A委員

フリーターやニートでも生活ができるという背景には、子どもの数が少なくなった事により、親としては無理せず自宅にいてアルバイトでもいいという気持ちが若干なりともある事に関係する気がします。子どもの数が少ないので、逆に大事にし過ぎているのです。それにより、結局は子ども達の職業観が大分変わってきているのです。

また、私達にとって深刻な問題ですが、ここで育てて将来は青森のためにといい、上

級の大学に進学させても、彼らが帰ってくる受け皿が少ないのです。例えば、教員採用は今年も10倍を超えています。青森のために頑張ろうと勉強してきた良い人材が来ているのですが、受け皿がないのです。一般企業もそうです。良い人材が県内から逃げて行く事が非常に残念です。だからと言って、企業に青森県出身者を優遇してくれという事ではないのですが、子ども達にせつかく将来の事を考えさせながら教育していますが、いざ実際に将来を考えてみると厳しい状況があると感じます。

高山委員長

フリーターの問題はありますね。これはどこの方もおっしゃるのですが、雇用機会の喪失は産業界の責任と言うと変ですが、企業はリストラで人減らしをしている中で採りたくても採れないので、県内に住みたい高校生も仕方なく県外に就職してしまう傾向が最近強くなっている感じがします。国の景気が良い時は、首都圏の求人が活発化してどんどん出て行き、景気が悪くなると青森に留まるという、雇用の調整弁のような位置付けがあったと思います。

B委員

生徒の印象ですが、外から見ている時は、外見は非常にだらしくなっていますし、大人から見ると色々違うなという印象を持っていました。実は現場に入ってみると、今の子どもも心や気持ちは我々の頃と変わらず、良い部分と悪い部分を持ち合わせています。むしろ、社会が変わってしまったのに子ども達が変わっていないのを見て、反対に子ども達が変わったのだと大人が言っているのではないのでしょうか。高校生はある意味子どもですので、導き方によっては昔と同じように能力を開発できる可能性と拡大できる要素は持っているという印象を非常に強く持っています。

若者に示す励みは何かという部分では、非常に先が見え難く、先を与えられない状況で、子どものやる気を起こさせるのが大変な時代です。特に青森県の場合は、親が子どもを地元に残したいという希望に沿う事ができません。ただ、県外からはどんどん来てくださいと言われていています。その中でどうするべきか悩んでいる子どもがたくさんいます。そういう子には、青森県の教育方針は、県内の人材だけではなく日本を背負う人材を輩出して行くのだというような、全く違う発想を示しても良いのではないのでしょうか。それくらい県外からは人材を望まれていますし、実際に輩出していますので、そういう考え方も必要ではないかと思います。

高山委員長

県内の大学生と関東等の県外から来た大学生を比べると、どちらかと言うと県内の大学生は発言しません。この前も中国の大連で大学生の話を聞いたのですが、やはり我先にと言うか、人に負けないという意識が強いようです。この資格を取ると給料が上がるとか、目の前にインセンティブがあるので、とにかく上昇志向の強い方々が多いです。

また、夏にニューヨークからねぶたへ来た大学生達のアテンドをした際に、ある市内の大学生と交流会を行ったのですが、結局は留学生とアメリカの学生が話し、日本の学生達は隅っこの方で固まっていました。これまでの色々な教育の結果なのか県民性なのかは分かりませんが、一步前へという姿勢が少し足りないと言うか、色々な人がいる中での自己アピール力が少し足りないのではと思いました。やはり、物事の両方を見る事が必要ですので、郡部と市部でも、青森県と海外でも、色々な面で交流や情報交換を考えて行かなくてはなりません。

社会の変化についての今後の共通認識として、人が減る中で青森県の限られた若い人材を、人格を含めて、世界に羽ばたけるように育てる事がテーマになると思います。あるいは、個性が生きる教育も必要ですし、自立した人間を育てるような教育のスタイルが望まれているのだらうと思います。そういう中で、前回の高校教育改革の中で様々な取り組みをしてきた事の検証という部分で、資料1により前回までの内容についてまとめて行きます。

高校生全般については、挨拶ができない、常識がない、そのままでは通用しない、という厳しい御意見もあったと思います。

離職率については、七五三の話がありました。せっかく高校を卒業し就職しても、3年以内に5割が離職してしまうと言われるほど離職率が高いのです。キャリア教育のような、実際の職業に近い科目が必要です。

様々な専門性が高い学科で学んでも、社会に出て腕一本で食える訳ではなく、やはり基礎基本が大事というお話が出ていました。

余り多様なメニューを生徒に提供しても、逆に判断できないという事もあります。

中学校から高校に入る段階で、資格を取りたいという目的を持って入学してくる子はほとんどいません。高校3年間で、職業や進むべき道を探して行くための情報を教えた方がいいという事でしょう。

個別の部分では、県内の進学率について学校が非常に頑張っている部分がありますが、中には生徒の進学に関する意識がなくなってきたというお話もありました。

総合高校はこれからの主流となる部分ではないでしょうか。その中で「産業社会と人間」という科目で、自身のモチベーションを高められるのです。

職業高校全般については、やはり専門性と基礎基本の住み分けが必要です。

これで皆さんからいただいた様々な意見について、何ヶ月か前の記憶は取り戻せたのではないのでしょうか。

それでは、皆さんから事前にいただいた御意見をまとめた、資料2をベースに中身に入って行きたいと思います。右側の欄には、県の高校長協会の御意見を簡単に載せてあります。これについては、参考という事で拘束される事はありません。

最初に、これまで設置した学科・コースの今後の在り方という事で、これまでやってきた事が果たしてどうだったのかについてです。色々な話し合いの仕方がありますが、ここでは全体のバランスとしてどうなのかというお話を先にして、それから専門性の高

い個別の分野に入って行きたいと思いますがよろしいでしょうか。

それでは、現場では色々な形で改革に取り組んでいると思いますし、生徒からも色々な話を聞き、家庭からの相談を受け、御自身もお考えになるでしょう。地域の環境の変化等を踏まえて、今の現状について感じている事をお話しただければと思います。

C 委員

まず、保護者の方は、普通科志向という傾向が多分にあると思います。

本校にはスポーツ科学科がありスポーツ活動に力を入れているのですが、アスリート養成中心ではなく、第1回の専門委員会で申し上げましたように、卒業後に進む道を3つセットしてそれに沿った形で3年間学んで行くようにしており、特色ある学科として評価を得ているのではないかと考えます。授業の中で、老人クラブとの交流会や保育園訪問で幼児・乳児との接し方を学ぶ等、スポーツ科学科ならではの思い切った教育活動ができます。そういう意味で、特色は出せているのではないのでしょうか。資料2の高校長協会の意見にあります、英語科や理数科は旨く行かない部分もあるようです。ニーズにそぐわなくなってきた、実際に学校側としては教育するのが難しいという事があるとは思いますが、しかし、だからと言ってコース制にするのは反対です。コース制とし普通科への改編を図るという意見もありますが、コース制にするとその科独自の教育活動の展開がしにくくなり、逆に尻すぼみになるのではないかと思います。親は生徒本人の希望に沿って進学させてやりたいと思っているのですが、それぞれの特色ある学科についてはすぐにコース制にするのではなく、それぞれの科の特色をもう少し出せるような工夫をして行くべきです。これは、農業高校、工業高校、商業高校についても同じ発想で考えられるのではないのでしょうか。

D 委員

普通科での勤務経験しかないのですが、現在の勤務校では、ほとんどの生徒が4年制大学進学を希望しています。本校では生徒に対しては勿論、親御さんに対しても毎年面談を実施しているのですが、最近は大学を選ぶ際にその学部に行ってどういう職に就けるのか、どういう企業に入れるのかを気にする親御さんが増えています。それだけ青森県の人達は、仕事に就かないと駄目だという意識があるのだらうと思います。しかし、大学は学問の場なので、本来はそこに行く事でどういう企業に勤められるというものではありません。青森は就職難をまだ引きずっているのです、どういう職に就けるのかを気にしている親・生徒が増えています。

この前もお話ししましたが、学力を伸ばすにあたってまずは生活指導をきちんとしなくてはいけない、という思いを持ってやっています。例えば、決まりや時間を守る事、人の話をよく聞き、受け答えがきちんとできる事など、学校や社会の中での自己のあり方といった生活面での土台作りがしっかりできて、学習面での基礎基本の力も身につく、学力も人間性も高まって行くのだと思います。

英語科の今後についてですが、今は英語の大切さは誰でも分かっているどの普通科でも英語を重視していると思います。その中で、1倍を切っている英語科があるのであれば、これ以上特化させる必要はあるのかなという気がします。

高山委員長

親御さんの大学進学を選び方が、職業を意識したものになっているというお話でした。今までは学問のための大学でしたが、今は様々な職業体験等を通じて、従前に比べると生徒にとって職業や起業というものがよりはっきりしたものになってきているのかなという感じがします。出版物や職業体験という形で、就職意識の形成が教育と直結してきている気もします。また、専門性の高い学科で倍率が低い所は減らすべきという事でもよろしいでしょうか。

今のお話は今後の在り方でしたが、逆に私からお伺いしたいのは、こういう形で色々な学科・コースのように選択の幅が広がった成果の部分についてです。社会や生徒のニーズの多様化に合わせてメニューが増え、今では色々な分野で専門性の高い学習ができるようですが、成果や広がりを感じられるのでしょうか。

E 委員

よく生徒には、学校の在り方の話をしています。「地産地消」と農業では言うのですが、私が生徒に言うのは、「地産地生」と書いて地域の産業に尽くすために地域に生きて行くのだと教えています。専門高校は成績の輪切りで入ってくる子が多い傾向がありますが、それでも3年後に社会へ出すためにどうしたら良いのかと考えます。進学校に行っている生徒達は、大学へ行って優秀な人材と言われるかもしれませんが、青森県に帰ってくる保証はありません。しかし、君達は地域の優秀な人材として地域を支えて行かなくてはいけないし、どんな事があってもこの青森県に根を張って生きて行かなくてはなりません。だから、実は青森県を支えているのは君達なのだと話しています。専門課程を修めたら必ずその課程に関連する仕事に就かなくてはいけないのかと言われると苦しい所もあるのですが、どんな職業に就いても青森県に根を張って生きて行くという考え方で、3年間を送るように指導したいと思います。そういう観点が私のベースにあります。

ですから、学校や学科の統廃合についても、基本的には青森県で括るのではなく、地域というベースがないと成り立たないと思います。教育課程にはそれほど差はないと思うのですが、やはり地域に根差した学校を作るという観点から学科・コースを捉えた時や、地域のベースがどこにあるかと考えた時に、同じ科目の名前でも履修の中身が違う、同じ科目でも選択が違うという事があると思います。簡単に言えば、工業高校はどこでも工業技術基礎の科目を同じように教えると思うのですが、水産高校や農業高校のように地域の環境が背景にあるような学校では、同じ農業科学基礎でも多少違います。県南でりんごについて話しても駄目ですし、津軽で畜産を語っても全然駄目です。長い目で見た時には、統廃合や学科・コースについて基本的には見直さなくてはならないと思

ますが、ただ一律に見直すのであれば意味がないと思います。大規模な農業経営をする時には大規模な施設が必要ですし、小規模でも儲かるような農業経営をする所にはそれなりの施設が必要になります。そういう事から、これまでの学科・コースを考えると農業高校はみんな横並び的な所がありますし、教育委員会も同じような施設を作る所があるような気がします。

以前は農学校と呼ばれた時代がありましたが、業が付く事で生業・仕事ベースになりました。しかし、社会や産業構造ががらりと変わり、農林水産省や県の方針もそうですが、このままでは農業だけでは飯が食べられなくなりました。大規模農業以外は成り立たないのではと危惧します。それであれば、教育行政もそれにリンクした方向でなくてはならないのではないのでしょうか。ここで理想論だけを語っても駄目でしょうし、今までが悪いという事でもありませんが、これからは単に教育行政や学校の視点だけではなく、国や県の大きな方向性を踏まえて学科・コースを考えなくてははいけません。

高山委員長

地域の産業に開かれたような形でという事でしょうか。

E 委員

地域にとって、なぜその学校が必要かという事でなければ、学校の存在価値もないのではないのでしょうか。

高山委員長

地域から支持されて、産業界にも受け入れてもらえるような学校という事でしょうか。また、今までの農業高校の在り方を否定はしないが、今後については検討するべきという事でしょうか。

E 委員

否定するものではありませんし、将来を考えた時に産業構造の変化は当然の事です。更に農業の生産構造も変わっています。

高山委員長

専門性と基礎基本で言うと、生徒が将来は農業関連の職に就くという場合は、やはり農業についてはオールラウンドが望ましいという部分で、卒業してすぐに一人立ちするよりは何年かはもう少し幅広い分野で色々と学んだ方が良いでしょう。

E 委員

高校3年間でスペシャリスト育成を完結するという考えには立っていませんので、先に進むための1つのステップとってください。農業高校の専門性だけについて語って

もいいのですが、現状では専門性だけでは語れない子ども達が入学しています。二面性でもないのですが、農業ではなく農を愛する子ども達や、農業の教育活動を通じて人間性の回復を図りたい子ども達もいるのです。農業ではなく農を通して、高校3年間をきちんと勉強して行きたい子ども達がいるので、そちらもおろそかにはできないのです。

高山委員長

もう1つお伺いしたいのは、農業高校は市部にはなくていいのでしょうか。市部と郡部の違いはあるのでしょうか。農業高校には、農を愛する子ども達が集まる事もあるでしょうし、市部のような普通科、英語科、理数科とは違ったコースを作らなければいけない所もあるでしょう。要するに、郡部と市部の再編の動きという事で、第1専門委員会では郡部の高校の在り方として専門性を高め、より特化したようなコースを考えて維持して行くのか、あるいは市部並みに普通科でどこでも通用するような人間を育てて行くのかという議論があります。郡部の高校の在り方について、お話ししたいと思っています。

E 委員

郡部の小さい高校は、町立・村立的な側面を持っていると思います。県立ではあるのですが、この町にこの高校があるから活性化しているという面は否定できないと思います。高校があるから町もがんばれる所もあるし、金銭的な援助をしている所もあるようです。そういう意味では、人口割りで郡部は削るという一律な考え方は厳しいです。どこで線引きというのもまた難しいのですが。

農業高校は普通科に学区があった頃から全県区的な立場で動いていましたので、どこになれば生徒が集まらないではなく、こんな教育活動をしているから生徒が集まるという立場です。例えば、県南の農業高校にも津軽地方から結構入学しているという事実からも分かるとおり、親元を離れて下宿してでもその学校に行きたいという魅力さえあれば、どこでも成り立つと思います。先週も他県の保護者の方が来て我が校に子どもを入れてくれないかという言い方をしていましたが、入れる入れないではなく、うちの学校はこういう教育をしてこういう生徒を育てていて、良い面ばかりでなく悪い面もありますときちんと説明しました。魅力や特色のある教育活動を展開する事が、専門高校、普通高校とも必要ではないかと思っています。

高山委員長

今までの学科・コースの検証から抜け出せないのですが、評価できる事や今後の方向性についてこうするべきだというお話しをいただければと思います。学科・コースや、生徒や社会の多様なニーズの変化に応じてやってきたと思いますが。

F 委員

本校の前身高には普通科と商業科がありまして、実は商業科の生徒から本当は普通科に入りたかったが自分の学力では入れなかったという話を聞きましたし、実際に卒業後の進路を見ると、商業科でたくさんの資格を持ちながら、自分の特性を活かせなかったと言いますか、選ばなかった生徒がいたのも事実です。今に始まった事ではないでしょう。実際に総合学科になり生徒の選択科目の状況を見ると、商業科目を取るのは240人中20名程度という状態ですから、おそらく普通科志向はかなり前からあったような気がします。ただ、商業科があった時には県内は勿論、県外の金融関係にもかなりの生徒を輩出していた事を考えると、本校の商業科に限って言うならばかなりの役割を果たしてきたと言えるのではないかと思います。現在は高卒の生徒にはかなり厳しい就職状況ですので、何か資格を得るために上級の学校へ行きたいという生徒が増え、それで普通科志向になっているのではないかと本校でも感じられます。

もう1つ大事なものは、西北五地区に限った話なのかもしれませんが、合併前の五所川原市において、その隣町にも普通高校がありますが、実際に生徒が高校を選ぶ時には、五所川原市内の普通高校に入れなければ工業高校でも農業高校でも仕方がないと考える生徒がかなりいるような気がします。なぜかと言うと、隣町にも普通高校があるのですが、市内からは流れようとはしないのです。結果的に、工業高校は第一志望ではないのだけれど今の状態ではそこにしか入れないという生徒もかなりいるような印象を受けています。ですから、卒業した生徒の進路をもう一度確認して、自分がやりたかった事や高校で身に付けた事がそのまま今の職業に結びついているか調べる事が、学科・コースの必要性と関連しているのではないかと思います。

もう1つは、例えば西北五地区で考えると、深浦町などから工業高校に入りたいが経済的な理由で入れないという生徒もかなりいます。そういう事を考えると、今の進路の状況だけで考える事は危険な気がします。この後で問題になってくるのですが、やはり入試制度の方が大事なかなという気持ちがあります。今の状況だと学力が先にきてしまいますので、入りたい学校より入れる学校の方に生徒の気持ちは向いてしまう事がほとんどで、実際に入りたい学科と違う所に行ってしまうという結果を生む事になってしまいます。

高山委員長

今までは生徒の普通科志向等の色々なお話をいただきましたが、ここからは農業高校、工業高校、商業高校等の専門部分について、どうすればいいのかについて御議論をいただければと思います。

G委員

中学生の希望は普通科志向だというのは間違いないです。本校は地元が半分で残りの半分は弘前方面からの生徒です。中学校への説明会では入れる学校ではなく入りたい学校を選んでくださいと言ってきているが、現実はなかなかそうはなっていないのです。

社会の変化についてですが、新聞では夕張市が小学校1校、中学校1校にするという案を出しているようですが、3ヶ月で住民が150人も転出してしまったそうです。青森県も財政が厳しく、今回の改革も財政からきているのではと言う人も多いのですが、財政を立て直すための改革では誤るのかなと思います。また、普通科志向ですから普通科を増やすのは良いのですが、その前に都会志向なのです。町村部の高校にいる生徒は、成績は良いが経済的な理由で入る生徒、市部の学校を受けても入れない生徒、そこでやってる特色あるクラブに入るための生徒の3通りに分けられると思います。もし可能であれば市部に行きたいという生徒が多いと思います。実際に、市部から私立の高校がバスを出していますので、私立へ行くお金さえあれば行きたいようです。ですから町村部の学校をすぐに無くするのではなく、60kmの距離でも私立は努力して生徒を送り迎えしていますので、そういう事を充実して市部に行きたい人には行ってもらいたいと思います。そうすると町村部の高校は徐々に減ると思いますので、その時には校舎制等にすればいいと思います。生徒の希望・夢がかなう条件を整理して、これから十年間の前半をそちらにあてて、そうすると淘汰されて行くでしょう。その時に大胆に統廃合をすれば良いのです。いきなり統廃合をするととなると、地域の色々な面の影響が多過ぎるのではないのでしょうか。

商業系の学科が役割を果たしているのかというお話がありましたが、全国的には平成17年度に商業高校卒業生から9人が公認会計士になっています。スペシャリストを目指すという意味では大学の1~1年半分は先取りしていると言えるのではないのでしょうか。それは工業高校にも言えるでしょう。そういう意味では存在価値はあるのですが、ただそれを目指す生徒はやはり一部です。ですので、大胆に商業高校は減らしていいと思います。今は5校ありますが、市部に3校ぐらいあればいいでしょう。そこで本当にそういう道を目指す教育をやればいいのです。

もう1つは、商業高校へはあまり望まないで入ってる生徒が多いのですが、実際に3年間の中で、国語・数学・英語が得意でない生徒が入ってきて、専門の科目をやるなかで開花して行く生徒がいるのです。それを手取り足取り指導できるのが専門高校だと思います。色々な面からアプローチさせ、花開かせるための教育は必要です。

それからもう1つですが、普通科志向かつ都市志向の中で、普通科を増やすとなると一番困るのは私立です。急激に生徒が増えた時代には県の代わりに私立が役割を果たしてきました。それを今になって私立を切り捨てるのかという話もあります。普通科を増やすと、直接に私立に影響があるようですが、今はそういう事を考えて案は作れないでしょう。現実には、下北地区以外は、私立は市部にありますので、市部の県立の普通高校の定員を減らさなければ、生徒数は減って行く事になります。そういう社会状況になってきたので、これは仕方がない事ですが大変だと思います。

もう1つは、県は進学に力を入れているようですが、この数字が十年後に70~90%となるかといったら、それはならないと思います。これから十年後に親になる世代は今の30代前後だと思いますが、そういう人達よりは今の親の方が経済力があると思

われるので、十年経っても進学率は大幅には増えないと思います。そうすると、多くの生徒は、かわいそうですが、進学できなくて就職する事になります。高卒で社会に貢献して行くためには、少しでも先取りして社会に役立つ事を勉強させる事が我々の責任ではないでしょうか。普通科志向という理由だけでは改革を進められないと思います。

統廃合についてですが、専門高校が統合する場合は専門性を減じないようにするためにぶら下がり方式の総合専門高校がいいと思っていました。しかし、岩手県の元校長先生から聞いた事によると、岩手県では専門高校を統合して困っているという事でした。商業学科はデスクワークなのでそれほど指導者の数も多くはなく、農業学科とはかなりの差があるようです。調べてみたら、本校と、本校と同程度の生徒数の農業高校を比較すると、本校の教員は50人ちょっとですが農業高校では90数人でした。そういう状態でぶら下がり方式にした総合専門高校でどういう事になったかということ、1年生は括り募集で、2年で系列に分けた所、生徒が商業系ばかりにくるそうです。つまり、苦労したくないという生徒が多いのです。これは県内にある総合学科にも一部言える事ですが、教員の配置人数が少ない商業系に生徒が多く集まると授業が成り立たなくなり、1つの学校としては旨く行かないのです。専門高校を一緒にするのであれば、そういう事を取り払った専門高校でないと難しいようです。考えてみると、商業高校で勉強して電器製品販売系のセールスマンになるにはやはり電気の事を分かっていないとセールスしにくいように、工業にとっても商業の知識は必要です。農業も同じで、経営して行くには商業の知識があった方がいいのです。

高山委員長

総合専門高校について他県のお話をさせていただきました。多方面についてお話しいただきましたので、少しまとめさせていただきます。普通科志向の他に市部で勉強したいという志向が強く感じられる、専門性の高い高校・学科は専門性をより高める必要があるのではないかと、入れる入りたいという面ではモチベーションが低い生徒でも取り組みやメニューの準備によっては生徒の資質を高められる可能性はあり、資格取得や前向きな成果を出しているケースもあるとの事でした。

H委員

まず、普通科志向は分かるのですが、今のお話しにあった総合専門高校で商業科へ集まるという状況と同じような現象ではないかと見ています。つまり、高校に入ってきている生徒は、どちらかということ「とりあえず入学」が多いと捉えています。とりあえず高校に入学して、何になるかはまだ決めていないのです。今の生徒の志向を考えれば、やはり楽をしたいという所があると思います。普通科志向というのは、進学校を志望する生徒は別ですが、大部分の生徒は高校卒業後の目的がまだ決まっていないのです。特に、郡部の生徒に「とりあえず入学」が多く、とりあえず高校の資格を得て、高校にいる間に自分の進路を考えようという生徒が多く、それが普通科志向に繋がっているの

はないかと捉えています。

学科の細分化によってどうなったかと言うと、一概には言えませんが、私が言いたいのは、キャリア教育を中学校段階からもっと充実させてもらいたいという事です。高校進学に一番影響を持っている中学校の先生は普通科を終わっている先生が多いので、指導を進める段階で良く知っている普通科については説明できても、専門高校の事については良く説明が出来ないのです。中学校の先生には、専門高校を終わっている人はほとんどいないのですから。ですから、専門高校の事についてもっと理解してもらいたいです。例えば、専門高校からは大学進学もできますし、未だに専門高校 = 就職だという概念もあるようです。親御さんもそうです。極端に言えば、本校から中央大学へ指定校推薦がある事も分らないですし、一橋大学へも入れる事を分らないのです。特に最近では、将来経理関係の就職を考えた場合、商業高校で早めに専門の勉強して上級の学校に行って勉強しようという生徒が増えてきています。そういう生徒が1人2人と毎年増えてきています。これは商業高校にとっても生徒にとっても非常に良い事だと思っています。高校卒業後の進路を考えた場合でも、商業高校から行けないのは工業系と医療系だけで、それ以外はどこにでも行けます。こういう宣伝の仕方を中学校と連携して行けば、専門高校も伸びる可能性はあるのかなと期待しています。

高山委員長

工業高校でも色々な専門分野があると思いますが。

B委員

今の議論は既存のシステムをどう発展させて行くかという発想なのですが、社会が何を望んでいるのかから考える必要があるのではないのでしょうか。例えば、高校は成績の輪切りだとか学力だけで分けているという事ですが、実は高校で身に付けなくてはいけない事は学力や技術力だけではなくて、人間性とか生きる力が必要なのです。このような面から、4学級とかの学校規模の話が出ています。必ずしもその学科で能力がどれだけ身に付いているかだけではなく、その他の力が付くという存在意義も当然あるのです。一律の価値観を基準にする必要はなくて、存在意義をどこに置くのかが大切なのではないのでしょうか

普通科志向というのは、輪切りの中で上位に行きたいからそうなるのですが、うちの工業高校では工業に入りたいという生徒が圧倒的に多いのです。何がと言うと、電気でも機械でも何科でも良いから、工業高校に入りたい生徒が多いという事実があります。ですから、これからの方向性としては今の基準の中での細分化は有り得ないと思います。卒業したその先の事を考えた時に、やはり進学なのか、就職なのか、もう一方では地域に残るのかどうかで選ぶ事ができ、それに応えて、地域に特化して地域で活躍する人間を育てる、そういった目標を明確にして新しい学科再編をすればいいと思います。そうすれば、いる人数はどこかに入るのですから、成り立つのではないかという気はしま

す。そう考えると、今は学科が工業、商業となっていますが、やはりこれからはそうではなく、就職する、進学するで分けるべきです。就職する方は商業的な仕事、工業的な仕事、農業的な仕事などで分かれ、最も共通の部分として、就職してすぐに使える人間性や基礎基本や規範意識等をきちんと教育するのです。進学する方は、高校が中学校と同じくらい義務教育化している現状では、余り目的も無く入学する生徒も多いので、そういう生徒の受け皿的な学校も作らなくてはいけないと思います。このように考えると、これからの時代にあった再編ができるのではと思います。

進学率についてですが、おそらく経済力で決まっている傾向も強いのです。上級の学校に行かせたいが、お金がなくて行かせられないという数が増えてきているのです。気持ちとしては青森県も高学歴化している世の中に付いて行かなくてはと思うのですが、経済力がどう変化して行くのかを考慮した上で伸び率を推定する必要があると思います。

高山委員長

専門性や産業の盛衰がある部分は別としても、地域との関わりと言うか、地域が工業高校の学生を地域で活躍してもらう人材として受け入れる素地、産業としてのキャパシティー、都市構造、そういった事を総合的に考え、工業高校の生徒を採用する地元の支持を得る事が必要だなという感じがしました。就職もできるし進学もできるという可能性を持つ子ども達が、もし家庭の経済的事情で諦めざるを得ない状況になった場合は、その学校で技術や資格を得る事で進学する以上の可能性を与える事も可能であるというように、全てが普通科志向ではなく専門性を活かした特色を持ち、人間力を含めた教育をする事で生徒も学校も評価されるという意義を構築できるのではないのでしょうか。

B 委員

そういう学校を1つくらいは作るべきで、工業高校と商業高校を足した産業高校のような形で、他県の事例を見ながら検討して行く価値はあるのではないのでしょうか。

I 委員

工業高校という観点から言うと、自分達の教育に自信を持っていますし、青森県の工業高校はこれまでも非常に成果を上げています。特にここ1～2年では、県外からの求人が盛んになってきました。考えてみると、九州や東北の学校に対する求人が多くなっています。我々にも流行と不易がありまして、流行の部分は学科を変えたり、新しい学科を追加したりしながらやってきました。不易の部分は、休まない事や真摯で素直な姿勢です。ちなみに、工業高校の生徒は1週間に1回実習があるので、1週間に1回のレポートを3年間提出し続けなくてはなりません。おそらくどの工業高校でもそうです。企業の方と話をすると、非常に素直な生徒が多いと言われます。つまりその子達は原石なのです。あるいは、専門学校や大学でもまず言うのは、おたくの生徒はそんなにできないかもしれないけれども決して休まずに頑張っているという事です。そこを工業高校

の不易な部分として、我々の教育効果ではないかと思っています。

工業高校を卒業した親が、その子を工業高校に入れる傾向があります。確かに、普通高校にやりたい気持ちも分かりますが、それは1つのモラトリアム化ですし、先程他の委員がおっしゃったように中学校の先生も進路指導にあたっては普通高校を終わっていますので、専門教育に関する進路についてはほとんど指導できないのです。やはり、専門高校は進学も就職もできますし、そして大学でも目的意識を持った卒業生を求めているのが事実です。普通高校を卒業して学力が高くても、専門に少しも興味を示さないというのであれば何もなりません。工業高校では、「ものづくり」というものをベースにして、新しい学科の在り方を考えるという事が大事なのではないのでしょうか。

Ｊ委員

確かに、専門高校の割合が全国平均よりも青森県では高いようですが、農業高校が地域に果たす役割がかなり大きいと思います。例えば農業高校での農業体験、工業高校でのものづくり体験、こういった地域に果たす役割はかなり大きいのです。本校では幼稚園から中学まで、年間3,200人の子ども達が農業体験をしています。この人数を市の施設等で受け入れる事はなかなかできませんし、そういう意味で農業高校の果たす役割は大きいので、全国平均まで下げなくてもいいのではないのでしょうか。青森県なりのいい部分を出し、少くくは専門高校の割合が高くていいと思います。

現在農業関係の高校は7つありますが、学科はほとんど同じ学科が設置されています。りんご科、動物科学科など一部は特色ある学科もありますが、地域の実態に合った特色ある学科を設置してはどうでしょうか。

高山委員長

大分時間が経ちまして皆さんお疲れだと思いますので、休憩を取りたいと思います。

~~~~~ 休憩 ~~~~~

#### 高山委員長

再開してもよろしいでしょうか。理数科、外国語科は世の中の流れというか、国際化等の社会や経済の変化に応じて新たに設けられたと思いますが、この辺の状況についてどなたか御意見ありませんでしょうか。

#### B委員

理数科が本校にあるのですが、全日制普通科の学校に1学級だけくっついている美術科、表現科、人文科、或いは理数科、英語科も含めてですが、現状では定員割れしてい

るような状態で、やはり中学生や保護者等のニーズにかなっていないのではないかという気がしています。実際、そういう学科を持つ学校の先生方のお話を聞いても、なかなかやりづらい、学校が向こうとしている方向と1学級だけの学科の存在のバランスを取るのが難しいという話を聞いています。私は全日制普通科に1学級だけ設置されていて定員割れしているような学科は、廃止を含めた見直しが必要なのではないかと思います。スポーツ科学科のように、3市にバランス良くあって、それなりの志望倍率もあり、先程の話のように3つの方向性で子ども達を育成して行くというような、学校として機能しているような学科については残しても良いのではないかという気がしています。基本的には定員割れを起こしているような1学級の学科は、見直しの方向で検討した方が良いと思います。従来それらは、特色ある高校づくりの一貫として設置されてきたものではないかと思うのですが、学校の個性にもつながっていないような気がします。ですから、それらを取った形で普通科だけを考えた方が良いのではないかと思います。そうすると特色ある高校づくりが随分薄まってしまい、各学校が似たような普通高校になってしまうのではないかという恐れがあります。それは、各高校がバランスの取れた人間形成を目標に掲げてやっているが故に、逆にその学校が目差す学校とか人づくりが見えにくくなっている気がするのです。

そこで、思い切って各高校が、ウチの学校は国際社会に飛躍できるような人材の育成をしたいのだとか、地域に貢献できるような人材を育成するのだとか、学校の目差すものを明らかにして、総合的な学習の時間だとか学校特設科目を活用して、前者だったら、専門高校で良くやる例ですが、英語教育の充実を掲げて、3年間で全員英検準2級を目差すとか、明確で具体的な目標を掲げて良いのではないかと思います。そして、修学旅行もウチはそれ故に海外修学旅行を実施しますとか、というような方向でも良いと思います。後者の地域に貢献できる人材の育成という形では、保育、看護、介護などというものを念頭においたカリキュラム作りで、例えば、積極的に地域の色々な施設に出かけて行って、その体験活動を単位として認定して行くとか、そういった形でカリキュラム的な特色を出して行く事の方がこれからの方向性として大事なのかなという気がしています。実際、他県の状況を色々調べてみましたが、今年の9月17日に奈良県で特色ある学校づくりの提言というものが出ているのですが、その中で、これから奈良県は4つの学校の方向性で行きますという事が出ていました。1点目がコンピューター技術や情報通信の知識、バイオテクノロジー、観光、国際技術など時代に即したテーマを実践的体験的に学ぶ高校。おそらくこれは専門高校を指していると思います。2点目が音楽などの芸術分野を総合的に学べたり、国際社会に対応した実用英語や異文化理解の勉強が出来たり、理科や数学が大好きになるようなカリキュラムを特色とするなど、好きな分野を伸ばす事ができるような高校。3点目が普通教科、科目を中心に、より専門性が高い職業を将来の目標に据えて、大学進学などを目指す高校。これがおそらく普通科の高校ではないかと思います。4点目が3部制の単位制や聴講生制度を取り入れて生涯学習のニーズにも対応した、学びたい時に学べる学校。これはおそらく定時制・通信制の高校

ではないかと思えます。私は2点目の音楽などの芸術分野を総合的に学べたりという部分で、全日制普通科に併設された1学級の特色ある学科を取ってしまったら、何も特色のある高校が作れないというのであれば、新設の高校を新しく建ててというのはかなり財政状況が厳しいと思うので、例えばですけども、既にある資源の活用という意味で、県の総合学校教育センターという立派な施設の活用も考えられると思います。そこには英語の専門の指導主事や家庭科の専門の指導主事がいますし、美術の専門の指導主事もいる訳です。そういう資源を活用するという意味では、青森市のセンターに近接するような高校にそれらの学科等を集約して、そういった芸術を総合的に学べたり、或いは理科の施設もセンターにはたくさんありますので、そういった全く新しいタイプの学校を新たに建てるというのはリスクが大き過ぎるので、それらの学校を集約する形で、既存の施設、人材を活用するような高校を1つ作るという事もできるのではないかと考えております。その際、青森市に1つだけそういう学校を作って、他の地域の生徒はどうするんだという事になりますが、これも前にお話ししましたが、実際には美術科は青森市にしかありませんし、表現科は八戸市にしかありませんし、実際には偏っている訳です。ですから、もしそれを青森市に設置するとすれば、遠隔地から来ている生徒のための奨学金とか、授業料の減免措置とか、一律所得の減免ではなくて、地域的なものを考慮して、経済的な補填措置等も考えれば、そういったものも多少活かせるのかなという気がしています。

#### 高山委員長

今までの特色ある学科の定員割れの部分について、廃止等も含めた見直しをしてもいいのではないかと、というお話から始まって、ただ、そういう部分だけには止まらず、例えば普通高校でも特色ある時間を設ける事で、中身として特色ある部分を持ちながら学校運営をする事によって、普通高校でも特色を持たせる事が可能ではないでしょうか。そういう話を含めて、教育センター等を活用する事と、奈良県の4つの学校経営方針についてお話しをいただきました。大変興味あるお話でした。

#### K委員

高校も中学校の延長線上にあるのですね。そういう事を考えると、これも社会の要請でこうなったのでしょうが、入り易いと言いますか、なるべく100%高校に入れるような形を作ってきたのが今の現状だろうと思います。先程話に出ましたが、いわゆる普通高校に入りたけれども入れないのでとりあえず商業高校に行ったとか、農業高校に行ったとか、本来はそういうものではなかったはずですが。私が高校生の時代には、酪農や百姓の息子は農業高校へ、商店や呉服屋の長男は商業高校へ行って簿記と珠算の検定を取って跡を継ぐ、土建屋の息子は工業高校へ行く、というのははっきりしていました。今はそういう状況にないというのは認識しておりますが、これから先、子ども達が減って行く事を考えますと、半世紀前に戻しても良いのではないかと私は考えるのです。ど

なたかから話がありましたけれども、高校を進学と就職とではっきりさせようという事です。コースや学科が果たして活かされているのか卒業後の調査をしてみたいというお話しがありましたけれども、興味があります。青森県の場合は総合学科を取り入れたのは平成8年ですから、まだかなり若いのです。人文学科や自然科学など、こういう系列を6つも7つも揃えて、先生方も良くやるものだと感心しますが、それらも先程申し上げたとおり、やはり普通高校に入りたいたいけれどもしょうがないからこの学校に入りましたという事なのではないでしょうか。先程中学校の延長線上にあると言いましたが、今度はだんだん大学進学率が増えて、なんとなく大学へ行かないと気まずいなという世の中になっているのは残念に思っています。大学もピンからキリまでありますし、大学を終わってきても、読めない、書けない、話せないという人がたくさんいるのです。話せないというのは正しい日本語を知らないという事です。ただ大学を出たというだけの方がたくさんいると思うので、果たしてそれで良いのかなという気もしますし、やはり大学進学率だけを喜ぶべきではないという事です。高校を出て、地域のために働くという子ども達を育てる道はないのかなと考えると、もっと直接反映できるような科目や指導方法を取れないものかと常々考えております。段々変わっている訳ですから、科目等も3～5年で改廃を含めて見直して行く必要があるし、この先を考えて行くのであれば、はっきりと大学へ進む高校と、青森で働いて行く高校とを分けてはどうでしょう。極端な話かもしれませんが、私はそう思っています。

## Ｌ 委員

現場で一生懸命取り組まれている校長先生や先生方達の中で違和感がない訳ではありませんが、県の教育委員会等が一生懸命今までやってきた成果だと思えます。

まず、青森県の社会の現状をお話してみたいと思います。県の経済そのものがどうなのかという事を申し上げますと、私の一番新しい情報では、全国では、これから国が力を入れて行くのだらうと思いますが、北海道はまだ駄目です。仙台が土地が動いてきたようです。首都圏は皆さん御存知のとおりです。名古屋はトヨタの関係で良くなっていて今が最高だらうと言われていています。では全国的に青森県をどう見るかという事になると、この間の日銀の短観でも出ていますし、日銀の県内調査や全国調査を見渡しても、明るい明日はないというのが現実です。これは銀行の方もそうでしょうし、マスコミの方もその事でだいぶ叩いています。現実を捉えればそうだと思います。私達が大学を終わって就職した時には民間主導型で、私は公務員になったのですが、給料が安いから公務員には嫁にはあげないという時代でした。それが今では青森県の公務員と民間との給与格差がどれくらいあるかと言うと、公務員が10とすれば民間は6、或いはそれよりも下でしょう。優良企業は別ですが。我々商工会議所は3,000件の事業所を持っていますが、それらの中で調査をすると、部課長ではなくて一般公務員の30代、40代と比べて5割以下という事があります。そういう状況の中で、県内に子どもを留ませようという親達は果たしてそういう実態を分かっていない訳です。実態を分かってい

る親達は、将来子ども達が飯を食って、結婚して、子どもを生んで育てて行く、と考えた時に県内に留めておけるだけの力があるかと言うと、私は、ほぼないだろうと思います。そういう意味で、県の方も一生懸命頑張って雇用の創出に努めていると思います。各市町村もそれぞれ頑張っていると思います。それは今に始まった話ではなくて、ここまで経済が低迷してしまいますと、これを上げて行くためには10年20年ではなかなか上がって行きません。むしろ、現状維持に躍起で民間企業は頑張っています。そういう意味では学校教育の中で、幼稚園、保育園から小学校にバトンタッチし、小学校から中学校にバトンタッチし、中学校から高等学校にバトンタッチ。それは、幼、小、中、高まではそれぞれの先生方がそれぞれの経験の中でバトンタッチして行くのだろうと私は思います。では、高校はどこにバトンタッチするのかと言うと、大学にする者もあれば、社会に出てその社会の人達にバトンタッチする者もいて、ここで大きく高校教育の在り方は分かれるのだろうと思います。今までの話にもありましたが、中学校から高等学校に上がる時に、中学校の先生方が、本当にその生徒の特徴なり個性なりを掴んで高等学校に進学させてやっているのかという事を見ると、私はそうではないだろうと思います。私も長く教育委員会に籍を置いていた関係もあり、色々な先生方と話をしてきましたが、そういう事を垣間見えています。三者面談をしても、お父さんと一緒に行く子がいるかと言うと、10人中7人、8人ぐらいは、お母さんと一緒に行くのではないのでしょうか。そういう意味では、その子どもの将来はお母さんが担っているのだろうと思います。家庭教育の中でも、子どもの将来の事は、お母さんと子ども達が一生懸命に話をしていていると思います。今の学科・コースの在り方を見ても、今までも色々な事を県の教育委員会もやってきたのですが、もう経済がこれだけ停滞気味な時に、社会のニーズや、経済や産業の構造の変化や、社会の変化とは言ってられないだろうと感じます。商工会議所では3,000の事業所があり、小売部会、建設部会、建設関連部会、情報部会、不動産部会、理財部会等の12部会になっています。高等学校から社会に出した時に、十把一絡げで考えて良いのかという事なのです。色々な業種業態があり、色々な人達が社会に出てくる人達を待っていて、それを受け入れて、そこで会社の戦力になる人と即戦力にはならなくても一生懸命会社で育てて行く人とがあると思うのです。ですから、ほぼ義務教育化されていると言いますが、大学に行く生徒は別として、社会に出た時に対応できるような生徒を育てあげて行くのであって、コース・学科ではないのだろうと思います。そういう意味では、日本の1次2次3次産業はしっかりまだある訳ですから、農業高校、工業高校、商業高校は残して行かなければならないでしょう。統合等はあると思いますが、それはしっかりと進めて、青森県は農業、水産といった1次産業が基幹産業になっていますので、それらのニーズはあると思います。小手先で学科・コースを考えてしまうと、それがむしろ、生徒達が何をやって良いのか分からなくなってしまうのではないのでしょうか。我々が若い頃を思い出してみても、高等学校の時から将来何をやるかは決まっていなくて、とりあえず大学に行っても、大学が終わる時にも自分で何をやるかはまだ決まっていなかったと思います。どこへも行く所がないので公務員に

なったのです。自分は商売をやりたかったのですが、お金もなかったし、今みたいな起業家を育てようという時代でもないの、とりあえず公務員になったのですが、そういうものだと思うのです。長い人生のスパンの中で、義務教育を卒業してたった高等学校3年間の中で、余り大きい望みをしない方が良いのではないのでしょうか。民間サイドから言うとそうです。しっかり個性を磨き、しっかり社会に適応できるような生徒を学校と社会と家庭と一緒に育てるのです。それが、高等学校を終わって、大学を終わって、社会に出て何十年か後に花が開いてくるのだらうと思います。そういう意味では専門部分は専門家にお任せしますが、もう少しじっくり子どもを育てあげる時なのだらうと思います。

#### 高山委員長

地域という視点が入っていましたが、高校を卒業した後で民間をどう見て行くかという事で、余り形にこだわる必要はないだらう、出てきた人間性や個性という部分を上手く引き出すような形で、高校から上手く社会にバトンタッチできれば良いのではないかという話でした。

#### Ｌ委員

そうですね。昔は末は博士か大臣かと言っていましたが、エリートサラリーマンだけを育てるのではなくて、やはりエリートサラリーマンはエリートサラリーマンで良いのですが、道路工事で旗を振っている人のような人こそ社会では大事なのです。ああいう職業は最近出てきたもので、昔は道路工事の中では警備を雇ったものですが、あれも新しい産業だと思います。あの人達に良く聞くのですが、私はこれで良いのだ、これで飯を食って行くのだという事です。ですから、それぞれ一人ずつが飯を食って行くために何をやるのかなのです。それこそ、上だけを睨むのではなくて、もう少し底辺の方も睨みながら、学業は悪いけれどもそこで働いて飯を食って行ければそれで良いという考え方もあります。十把一絡げで色々な事を考えない方が良いと私は思います。

#### 高山委員長

1次産業のような青森県の特徴ある部分については、引き続き維持するべきという事ですか。

#### Ｌ委員

そうですね。青森県が名古屋になれる訳はありませんし、少なくとも、これから青森県も食糧供給基地になるのでしょうか。

#### 高山委員長

そうですね。穀物の食糧自給率は、北東北と北海道が高いのですから。

## Ｌ委員

ですから、もう少しそれを頑張っていかなければならないだろうと思います。

## 高山委員長

青森県の経済状況ですが、これからという部分で見ると、今現在は車、電気、電子機器などの分野で世界にどんどん日本製品が出て行っていて、ものづくりの基地としての愛知や北関東という事がある訳です。しかし、果たして2020年には産業構造がどうなっているのかは分からない訳ですし、別な形のサービス、或いは1次産業のバイオ等の形で青森県の特色にあった産業が、もしかしたら興っているのかもしれない、という感じも若干します。

## Ｌ委員

経済的には分かるのですが、それは極一部です。弘前の場合もキャノンや航空電子があるので雇用関係は2,000～3,000人はあります。しかし、2,000～3,000人の雇用でそこだけに光が当たっているのは良いのか、という事になると、私は底辺の方が岩木山の裾野のように広いだろうと思います。ですから、あまり上の方の良い所だけを語ってもしようがないだろうと思います。

## 高山委員長

そのためにも、行政の色々な取り組みとしては、裾野も広く7～8合目にも厚く対応するという事になると、民間の努力と行政の努力と教育の努力のそれぞれが特化して頑張らないといけないのだろうと思います。

## Ｌ委員

もう行政オンリーの時代は終わったので、民間に委託して努力して行く時代だろうと思います。

## 高山委員長

学科・コースの今後の方向性としては、町村部と都市部という話もありましたし、専門性の高い部分は数校に集約するというようなお話をいただきましたので、これらをまとめさせていただきます。

次のテーマとして、普通科における全日制単位制について協議を進めます。事務局から説明ありますか。

## 事務局

ここでテーマとしているのは普通科の全日制単位制の事です。現状では総合学科、定

時制なども単位制ですが、事務局側としては、単位制の制度そのものについてという事ではなく、単位制を今後拡大して行くのかという事を考えています。単位制というのは、資料にもありますが、学年による教育課程の区分を設けずに、決められた単位を修得すれば卒業が認められるという事ですから、大学のようなものです。実際には学年で動いているのですが、卒業に至る過程としては単位をとれば卒業できます。ですから、例えば3学年の授業で普通であれば35単位くらいを取る訳ですが、1～2年の状況によっては3学年では20単位くらいを取れば卒業を認定できるという事になり、後は学校に行きませんという事が場合によっては可能かもしれません。そのような学年によらないで、決められた単位数で授業がされるという教育の方法を採っているのが単位制という事です。

#### 高山委員長

私共民間人にするとなかなか理解できない部分もありますが、今日御出席の先生の学校ではどこになりますか。

#### B委員

うちの学校の定時制はそうです。定時制の場合は単位制にしないと卒業しにくいし、選択肢も少なくて済みます。そういう事に配慮する事が生徒の満足度を高めているので、今後も全く問題なくこのまま進めるべきでしょう。ところが、全日制に関しては、それだけ好みに合わせた多くの選択肢を準備できるのかが問題です。受け側をそれだけたくさん作っておかなければならない訳です。十分にそのコマを用意しなければ意味がないのです。現状ではその体制が無理に近いので、議論以前ではないかと私は思っています。実のある単位制という事で形式的にはできますが、実際に機能させるためには今の教える側の体制や施設の問題を考えなければならず、それはできないのではないかと思います。

#### D委員

県教委の方で我々に考えて欲しいのは、普通高校の全日制単位制の事だと思います。青森東高校と八戸北高校が今やっていて、青森東高校は今年卒業生を出すのです。普通科の単位制は色々なやり方がありますが、青森東高校も八戸北高校も進学を重視した体制なのです。良く分からない方は、ホームルームもないのか、担任もついていないのか、勝手に好きな時に行って、好きな時間割を組んで大学みたいな感じではないのかと思われる方も知れませんが、そうではありません。ホームルームもあり、担任もいる訳です。学校が自由に設定できる科目もあり、その中で、進学指導をし易いようなカリキュラムを作れるようなのです。東京都の新宿高校とかが、進学重視型の普通科単位制高校で成果を出しているようです。

まず青森東高校から今年卒業生が出ますから、その状況を良く見てはどうでしょう

か。しかも、青森東高校も八戸北高校も以前とそれほど大きく変わった事はしていないと思います。従って、青森東高校、八戸北高校の両校と、弘前南高校の状況を見て、それからどうするかという事を考えてもいいのではないかと思います。

#### B 委員

進学予備校が極端に少ない青森県においては、学校でそういった形で効率化を図るという事が必要な一面もあると思います。

#### 高山委員長

単位制のメリットとはなんですか。

#### M 委員

私も決して急ぐ必要はないと思いますが、青森東高校、八戸北高校の状況を見て、検証しながら、また増やして行けば良いのではないかと思います。単位制のメリットという点について、例えば不登校の問題もあります。学年途中で不登校の生徒が出てきた時にその子が授業の5分の1ないし、3分の1以上休んでしまうと単位が取れない状況になる訳です。その場合、あの単位も取れない、この単位も取れないという事になると、その子は進級できないという事になる訳です。そうすると、他に取れている単位もあるのですが、現在の学年進行のシステムですと、例えば2年生であれば2年生の単位全部がなくなる訳です。しかし、この単位制ですと、取れている単位は残る訳で、卒業までに必要な単位が取れていれば良いという事もあります。不登校の生徒にとっては単位制のシステムの方が良いかなと思います。

#### G 委員

東京都の新宿山吹高校は、不登校の生徒が多く、小人数でやっているようです。

#### 高山委員長

数名の先生方から意見が出されましたが、方向性としてはそんなに急いでどうこうという事ではなくて、今実施している学校の成果等の部分を分析しながら考えて行くという方向であったと思います。

#### K 委員

今の未履修問題とは全く関係はないのでしょうか。

#### B 委員

必履修はありますので、それは取らなければなりません。最低限取らなければならぬものは決められていますから、何をどうするかという事です。

### C 委員

生徒が学習する科目を自由に選べるという事で、選択幅を拡大するという趣旨だと思います。選択幅を拡大した事により、生徒が色々な科目を履修して単位を取って行くのです。場合によっては3年かかって卒業する所を、2年半で卒業できる生徒も出てくるかも知れません。ところが大学入試は1～3月です。9月に卒業したとして、その後空いた期間を、例えば大学受験したいから指導して欲しいという事がもし出てきたら、高校では対応できないです。予備校に行ってもいいのでしょうか。3年かかってやっと大学入試センター試験を受ける力を付けている時に、仮に2年半で卒業できるとしたら、そこには無理があるのではないのでしょうか。もし大学の推薦入試を受けたいと、その子から話が出てきたら、9月30日で卒業してしまうと、例えば大学によっては現役に限るという要件もある訳です。あるいは1浪までは認める大学もある訳です。現役に限るという要件であれば、9月で卒業してしまうとその子は大学の推薦入試は受けられない事になります。色々な部分で問題点も出てくるのではないかなと思います。

### 高山委員長

学習内容についても色々な違いが出てくるのでしょうし、選択幅の拡大というプラスの部分もありますが、そういうマイナスのケースも想定されるという事です。

### C 委員

青森東高校、八戸北高校、平成20年度から弘前南高校が全日制単位制で揃う訳ですが、現在の状況で行けば9月で卒業するような事はないと思います。前期・後期制でなく3学期制となれば、卒業の時期が難しくなってきます。

### 高山委員長

準備も大変なのではないですか。

### C 委員

生徒に選択幅を拡大した状態でさあどうぞと言うには、教室の数とか、スタッフの数とかを工夫して行かなければならないと思います。

### A 委員

現在、総合学科では単位制を行っており、青森中央高校も総合学科で単位制です。これはいい所もあります。今お話が出ていた選択科目ですが、総合学科では100を超える選択科目がありそこから選べます。そういう意味では、進学型の普通高校において、必修は別にして、自分の進路に応じた科目を選択して勉強させる事ができるので非常に効率的です。ただ、科目の選択状況によっては40人学級ではなく30人になったり、

20人になったり、少ない所は10人になったりはしますが、そういう点では非常に効率的だとは思いますが。また、例えば学年制における留年という制度はありません。ですから、1年目に10単位くらい落としても、2年生と一緒に上がれる訳です。ただ、その際、必履修科目などは取らなければならないので、その科目について1年生と一緒に授業を受ける場合もありますが、それは単位制のいい所だと思います。今、青森県の財政もありますが、単位制や総合学科をやる場合は、場所の問題、指導者の問題、そういう問題が非常に大きいので、色々な部屋をたくさん作って、色々な選択をさせるというのは効果的だと思います。そういう財政的、人的なバックアップを、是非お願いしたいと思っています。

#### 高山委員長

生徒が科目を選択する際には自分で選ぶのでしょうか、先生方と相談して決めるのでしょうか。

#### A委員

何回も相談します。総合学科の場合は特に系列の事もありますので、くどいくらい何回も行います。それをやらなければ本校のようなレベルの学校では、子供達が良く理解してくれないのです。校内の授業参観のような事も行いますし、担任との面談、教科担当との面談など様々行います。そして、時間をかけて科目を選択させます。もちろんモデルパターンはあります。自分で作った時間割だから、頑張ってやらせています。

#### B委員

それによって生徒はどのように変わりますか。生徒にとっての良さというのは何かあるのでしょうか。

#### A委員

進学したら良いか就職したら良いか分からない生徒に対し、キャリア教育として1年生の時に「産業社会と人間」という科目の中で科目選択の事等について、非常に分厚い冊子を使って説明をします。その中でまず職業意識や、自分の将来性について色々考えますから、自分自身が主体性を持って取り組む事ができます。もちろん数が数ですから、一人、二人はその系列に行っても違うものに変えたいと言う生徒はいますが、やはり、自分でここに行きたいという事を研究して行きますから、積極的になると思います。ただ普通の進学高校と異なるのは、進学校は入学して4月から受験勉強をさせますが、総合学科というのはまずその所を考えさせて、自分の考えを決めさせてから進みますので受験勉強を始める時期が若干ずれます。基礎学力など色々な問題はありますが、将来に係わる事について、制度的には優れていると思います。ただ、先生方が大変ですごく苦労します。

## 高山委員長

全日制の単位制については、先行して試行している高校が2校でこれから1校増えるという事で、方向的には力が入る部分だと思いますし、総合学科における中身の部分についても共通する事がありますので、やり方次第ではプラス効果が大きいと思います。また、生徒のモチベーションという点においても、非常に旨く行きそうな感じがしますので、引き続きという形ではないかと思えます。

色々な御意見をいただきましたが、方向性が示されてきたのではないかと思います。それでは、今までの話し合いを総括する意味で、副委員長からお話をいただければと思います。

## 佐々木副委員長

皆さんに触発されているという立場でお話させていただきます。県の財政事情が非常に窮屈なのですが、御意見があったように財政的なバックアップは必要なのだらうと思います。委員会としてはそこに踏み込むべきです。教育にもっと財政を投じるべきと主張するべきだと思います。実際の教育現場へのバックアップとしては、予算の関係だけではなく人的な派遣の問題もあります。地区部会の資料の中にあるように、音楽の先生や美術の先生に地区を回ってもらうとか。色々な特色ある学科や総合学科でノウハウを持っている先生を活用するとか。また外部の講師を雇うとか。1学級の人数も別に40人でなくても良く30人にしてもいいのではないかと。県教委は、基本的には1学級は40人というスタンスですが、私達は実はそこに拘束される必要はないのではないかと思います。もっと教育にお金をかけるべきではないかと発言していった方がいいのではないかと思います。例えば下北地域で言うと、貧しいとか学校が遠いとか色々な問題があります。では、そういう地域にはどういった手当が必要なのでしょう。例えば下北の1学級を30人にしてもいいのではないかと、色々な先生が必要な分を外部講師で賄うとかできるのではないかと思います。もう1つは、学校現場は選択権を欲しがっているのではないかという印象を持ちました。カリキュラムを色々な形で作ったり、総合的な学習の時間などを使ったりする中で、特色ある学校を学校経営の中で作れるという話がありました。そうすると、特に学科を設けなくても、例えば国際的な人材を育てるとか、下北には海も山も川もありますのでそういう地元の自然や産業などを関連づけて取り上げる地域総合学科のようなものを大畑のコースに作るとか、どんどん学校に判断を任せ、フリーハンドを持たせて行った方がいいのではないかと思います。私たちがここでメニューを作るより、学校にどんどん選択権を与える方向にできれば行ったほうが良いのではないかと思います。例えば、私達が今まで話してきたのは、学校側、県教委側でこういうメニュー作りをして、これでいかがですかという発想での議論だったと思います。そういう事ももちろん必要です。もう1つは、学校側にどうぞ自由にメニュー作りをしてください、予算も掛けますというような事もあります。

あくまで頭で考えた事なので、現実に可能かどうかという問題はあると思います。また、地域にも選択権を与えられたらいいんじゃないかと思います。検討会議や地区部会でも意見が出ているようですが、たとえば東青はどうだ、三八はどうだとか、地域特有の問題があると思います。もっと地域部会の話を大事にしたほうがいいです。子供達に選択権を与えるだけでなく、地域にも学校にも選択権を与えて、それに対して県教委はバックアップとして予算とか人件費を工夫してあげる。お金が沢山ある訳ではないので、何かを削らなければならないと思いますが、攻めの教育と言えはいいのでしょうか。少子化だから、過疎化だからという「寂しいだから」ばかりではなく、だから巻き返すんだという地域再生というのが大事かなと思います。

閉会

司会

次回の会議は1月を予定しておりますが、皆様の御都合もあると思いますので、日程を確認・調整の上、改めて日時会場等の詳細につきまして、文書にてお知らせさせていただきます。

以上をもちまして第3回第2専門委員会を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。